

クジラ型パラコキシジオイデス症に関する研究

(Studies on Paracoccidioidomycosis ceti)

学位論文の内容の要旨

皆 川 智 子

(指導教授：和田 新平)

本研究は、人獣共通感染症の候補と考えられる真菌症のクジラ型パラコキシジオイデス症（paracoccidioidomycosis ceti : PCM-C）による海棲哺乳類の事例について新規知見を得たので報告するとともに、飼育関係者だけでなく、海洋国家である我が国の国民の健康を守るために役立つ情報を発信することを目的とし取りまとめたものである。

第 1 章は緒論とし、第 2 章はクジラ型パラコキシジオイデス症について、世界初の PCM-C 発症を認めた国内施設で飼育されるカマイルカ（Pacific white-sided dolphin : *Lagenorhynchus obliquidens*）に加え、同症例に類似した皮膚病変を呈した同じくカマイルカについての、症状、検査、経過および診断結果について述べた。その結果、国内で飼育されているカマイルカに PCM-C と診断される個体が存在し、その原因病原体として *Paracoccidioides brasiliensis sensu stricto* が関与していることを初めて示した。さらに、分子生物学的に確定できなかったが、PCM-C を疑う症例も見いだすことができた。これら 2 個体はいずれも日本海において捕獲されており、日本近海に本症原因病原体が存在することが示唆された。

第 3 章では、新規診断手法の基礎を確立するため、国内で飼育されている鯨類について、それらの血清を用いて PCM-C 抗原に対して陽性反応を示す抗体の保有状況を検討し、本疾患の疫学的状況を調査した。その結果、供試した 41 検体の中の 61.0%の血清が陽性反応を示したことから、国内で飼育される小型鯨類の中には PCM-C 抗原に陽性を示す抗体を保有する個体が存在する事が示された。